



TITLE:

<Book Review> Robert W. Hefner and Patricia Horvatic, eds. Islam in an Era of Nation-State : Politics and Religious Renewal in Muslim Southeast Asia. Honolulu:University of Hawai'i Press, 1997, 327p.

AUTHOR(S):

小杉, 泰

---

CITATION:

小杉, 泰. <Book Review> Robert W. Hefner and Patricia Horvatic, eds. Islam in an Era of Nation-State: Politics and Religious Renewal in Muslim Southeast Asia. Honolulu:University of Hawai'i Press, 1997, 327p.. 東南アジア研究 1999, 37(2): 297-299

ISSUE DATE:

1999-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/56719>

RIGHT:



Robert W. Hefner; and Patricia Horvatic,  
eds. *Islam in an Era of Nation-State: Politics  
and Religious Renewal in Muslim Southeast  
Asia*. Honolulu: University of Hawai'i Press,  
1997, 327p.

本書は1993年8月にホノルルで開催された国際シンポジウムから始まり1995年まで行われた研究会をもとにして編集された論文集で、執筆は1996年に行われている。『国民国家時代のイスラーム——ムスリム東南アジアにおける政治と宗教再生』という題名が示すように、近年における東南アジアのイスラームのダイナミズムを、国民国家という制度が大きな規定要因であるとした上で、分析している。関心は、いわゆるイスラーム復興運動、国家によるその取り込み、あるいは「イスラームの主流化」と呼ばれる現象にも向けられているが、同時に、「普通の」ムスリムたちがそのような状況をどうとらえているかについても焦点が当てられている。本書の題名は、ピスカトリの『国民国家世界の中のイスラーム』James P. Piscatori, *Islam in a World of Nation-State* (Cambridge: Cambridge University Press, 1986) を思い起こさせるが、ピスカトリの書がどちらかと言えば国際関係論的な問題設定で書かれていたのに対して、本書は国毎の枠組みを前提に各国の事例を扱っている。

全体は4つに区分され、序(第1章)およびⅢ部立て(第2～9章)になっており、最後に全体を概括する第10章が付されている。編者の一人であるロバート・ヘフナーによる第1章は本書のイントロダクションというだけでなく、東南アジアにおけるイスラームの研究を総括し、また最近のイスラーム復興(本書では、Islamic resurgence の語が使われている)をどのように理論的に位置づけるかを論及し、また多元主義と民主化の諸問題に焦点を当てながら今後の方向性について検討を加えている。論文集のイントロダクションは、論文集の趣旨と各論文の位置づけを紹介する場合も多いが、これは力のこもった論文であり、冒頭にあって光を放っ

ている。これに比して言えば、南アジア研究者のバーバラ・メトカフによる第10章は、インドとの比較を行いつつ本書の論点を概括しているだけで、比較の部分が多少面白いとはいえ、長めの「後記」以上のものではない。

第Ⅰ～Ⅲ部はそれぞれ、「国家と市民的(シヴィックな)アイデンティティ」「改革者と改革主義」「ふつうのムスリムたち」と題され、独立後の国民国家とイスラームのあり方、イスラーム復興運動とその展開、それらに対する通常のムスリムたちの反応、が主題とされている。「ムスリム東南アジア」として本書が対象としているのは、インドネシア、マレーシア、フィリピン南部、つまり東南アジアの島嶼部である。大陸部に属するタイやビルマのムスリム・マイノリティーは対象とはなっていない。

第Ⅰ部では、フィリピン南部のコタバトを調査対象とした、トマス・マッケンナ論文、編者のヘフナーの、インドネシアの民主化とイスラーム化を論じた論文、アンドレ・フェイラーの、インドネシアのナフダトゥル・ウラマを検討した論文が収録されている。第Ⅰ部にはマレーシアを扱った論文は含まれていないが、第Ⅱ部にはシャムスルの論文があり、そこでは、マレーシアのイスラーム復興である「ダクワー運動」の史的展開と、取り込みを図る政府との緊張関係が論じられている。ヘフナー論文は、ICMI(インドネシア・ムスリム知識人協会)を主題にして、それまで「アバンガン(名目的ムスリム)」ないしは「世俗的」路線を追求してきたスハルト政権が1980年代末からイスラームの取り込みに舵を切った際に、いかにイスラーム派および民主化推進者が対応してきたかを分析している。当然ながら、96年に書かれた本論文では、98年に政治変動が起こることは前提とされていない。しかし、99年6月の総選挙までを考慮に入れても、色褪せない、十分深みのある分析がそこでは行われている。なお、シャムスル論文は、マレーシアの継続的な経済発展を前提に書かれており、97年以降の経済危機、アンワル・イブラヒム元副首相の失墜に伴う政府とイスラーム運動の新たな緊張関係などが持つ意味について、新しい書き足しを必要とする。

第Ⅱ部の他の2本は、インドネシアのガヨでのイスラーム改革派を分析した、ジョン・ボーウェン論

文と、もう一人の編者パトリシア・ホヴァティッチの、スィムヌル（フィリピン南西部）におけるアフマディー教団の浸透を扱った論文であるが、両者とも非常に興味深い事例を見せてくれる。ボーウェン論文は、改革派と伝統派のウラマーが、礼拝の際の「意図（ニーヤ）の表明」をめぐる対立した論争を紹介しながら、改革派の主張が彼らの社会的なあり方と結びついていたことを論じている。ガヨの改革派の場合、都市にありながら彼らの出身の農村をも改革しようとするスタンスがあり、ボーウェンはそれをアチェの事例と比較して論じているが、地域を超えるイスラームの論理とそれを実際に展開している主体の文脈を合わせて分析する立場は、大いに共感できるものである。また、改革派がその主張を広めるために詩作し、それを朗読したことが、詩の実例とともに紹介されているのが、非常に興味深かった。ホヴァティッチ論文にあるアフマディー教団は、南アジアおよび中東では異端とされているが、フィリピンの文脈では改革思想として機能している。この論文の著者は、改革派の運動は、一般に都市知識人のものとされているが、地方・農村部でも生じていることに注目すべきと論じているが、重要なポイントであろう。しかも、その原因は公教育の普及に求められるから、これは都市部でイスラーム改革が生起する理由とも関連している。説得性のある主張と言える。

第Ⅲ部には、2本の論文が収録されている。マレーシアの村において、普通の村人たちがイスラーム復興をどうとらえているかを、イスラーム復興派が「非イスラーム的」と非難する習慣（特に結婚式をめぐる問題）に焦点を当てながら論じた、マイケル・ベレッツの論文は、村人たちのアンビバレントな態度を浮き彫りにしている。確かに、イスラーム復興を論じた研究では、一般のムスリムたちの姿は霞んでいることが多いが、このような視点は不可欠であろう。インドネシアのスラウェシ南部、特にゴワ王国があった地域の山岳部を扱った、マーチン・ロスラーの論文は、村人が公式的にはすべてムスリムである（かつ本人たちもそう思っている）一方で、イスラーム以前から続いている祖先崇拜とそれにまつわる儀礼も実践されている宗教状況を描いている。そこでのいっそうのイスラーム化が、社会的上

昇の一手段として用いられている様相の分析は、大変興味深く感じられた。しかも、イスラーム以前の伝統とされるものも、すでに多くがイスラームの語彙で語られている（しかも、それでも村人たちは自分たち独自の伝統だと認識している）という点が興味深い。

十分なフィールドワークに支えられたこれらの事例は、いずれも興味深いものであり、東南アジア研究の部外者である評者にとって、大いに刺激を与えてくれる論文が多かった。評者はこれらの事例を、中東の場合と比較するとどのような位置づけになるか、などと考えながら読み進めた。しかし印象としては——部外者としては、これらがどれほど独創的なのか判別できないのであるが——日本でも東南アジア・イスラームの研究はそれなりに発展してきており、個別の事例はともかくとして、本書で論じられていることすべてが新しいというような状況にはないように感じられた。特に、本書には、テロや原理主義ばかりで語られるイスラームのイメージを変えようとの意図が強く滲み出ているが、この点については日本社会は欧米に比べて、脅迫観念的なステレオタイプからはるかに自由であろう。いかなる研究も社会全体の動向と無縁ではありえないが、欧米での反イスラーム的な論調を受けて、それへの警戒心のトーンがやや高いように感じられた。

上に触れたように、編者ヘフナーによる巻頭論文が本書の白眉である。評者は、クリフォード・ギアーツの功罪などについて、ヘフナーの鋭い評価を感心しながら受け止めた。また、東南アジアのイスラームが非常に豊かなバラエティーを内包している、という主張にもうなずけるし、本書の各論文がそれを証明していることもわかる。ただ、「中東のイスラーム」について語られるとき、未だなおモノトーンなイメージが強いように思われた。中東について、あるいは中東との比較においては、本書はほぼデイル・アイケルマンに依存している。助力を得るなら、彼のような良質の研究者であるべきであるが、もう一步「東西の対話（比較研究）」を進め、中東のイスラームの豊かなバラエティーについても認識を深めるべきと思われる。

ヘフナーはもう一つ、大事なことを指摘している。これまで東南アジア・イスラーム研究は二重に

## 書 評

周縁化されてきたという。つまり、イスラーム研究と東南アジア研究の両者において、無視され、周辺に追いやられていたのである。本書は、そこからバランスを回復しようとの試みであり、今後はこの分野で必読書の一つとされるであろう。しかし、これはあくまで東南アジアを対象とする人類学者による論文集であり、形態も内容も東南アジア研究に属する。ということは、イスラーム研究における東南ア

ジアの周縁化の問題は解決していない。もちろん、その部分を本書が埋められていないのは本書の責任ではない。ボールは、イスラーム学を専門とする者たちのコートに戻されている、と言うべきであろう。

(小杉 泰・京都大学大学院アジア・  
アフリカ地域研究研究科)